



海援隊旗(二曳きの旗)

<https://www.ryoma-kinenkan.jp>

春和 SHUNWA KEIMEI 景明

幕末維新期の写真展

会期・令和7年4月19日(土)～令和7年6月1日(日)

展示の趣旨

幕末維新期は、封建制から近代的な国家へと国の仕組みが大きく変わる過渡期である。それにとまなない、外国との交流が盛んになり、様々な新しい技術が日本へもたらされた。その一つに「写真」がある。現在、写真は世界中の多くの人が手軽に撮っており、日常生活に必要不可欠なツールの一つとなっている。写真を撮ることは、もはや世界共通の文化と言っても過言ではなく、その始まりが日本では幕末維新期だった。

幕末の人々は、人物や風景を写す不思議な技術に魅了され、多くの人が写真を撮ってもらった。坂本龍馬もその一人である。龍馬は明治までに亡くなったにも関わらず、複数の写真を残しており、写真に強い興味を持っていたことが分かる。龍馬は日本史の中で高い人気をほこる人物であるが、こうした人気の背景には、懐手をした龍馬の写真の影響もあるのではないだろうか。

この企画展では、龍馬をはじめ、幕末の様々な人物の写真を展示し、現代に繋がる写真文化の始まりを知っていただくと同時に、歴史上の人物の素顔を知っていただくことによって、幕末維新史に親しみを感ずてもらいたいと考えている。

日本の写真のはじまり

日本の写真の歴史は、ペリー来航の5年前に遡り、嘉永元(1848)年に薩摩藩の島津斉彬が銀板写真機を入手したことから始まる。しかし、銀板写真(ダゲレオタイプ)は、長い撮影時間が必要で、技術的にも難易度の高いものであることから、実用化に至ったとはいえない。

人々が気軽に写真を撮るようになったのは、写真技術が次の段階の湿板写真(コロジオンプロセス)に進んでからである。湿板写真の普及は、文久2(1862)年に長崎で上野彦馬、横浜で下岡蓮杖がほぼ同時期に商業写真館を開いたことから始まる。湿板写真とは、コロジオン液を塗布したガラス板を硝酸銀に浸し、ぬれているうちに撮影するもので、専門知識のある人にしか扱えなかった。したがって、幕末期の人たちが写真を撮ってもらう場合、一般的には写真師の開いた撮影所へ行くか、写真師に来てもらうしかなかった。



「坂本龍馬」坂井直常アルバムより

技術の進歩

その後、写真技術は目覚ましい進歩を遂げ、明治時代中期には、乾板写真が主流となり、さらには乾板写真に代わってフィルムが発明され、近年ではデジタルへと進歩した。その中で、現在世界のカメラ販売のシェアは、キヤノンやソニー、ニコンなど日本の企業が圧倒的の上位を占めている。

こうした状況をペリーは『ペリー提督日本遠征記』の中で、的確に予言していた。

「他国民の物質的進歩の成果を学びとらうとする彼ら(日本人)の好奇心と、それらをすぐに自分たちの用途に適用させようとする進取性をもってすれば、彼らを他国との交通から隔離している政府の方針がゆるめられれば、日本の技術は、すぐに世界の最も恵まれたる国々と並ぶ水準にまで達するだろう。文明世界の今日までの蓄積をひとたび手にすれば、日本人は、強力な競争者として、将来の機械的技術の成功を目指す競争に仲間入りするだろう。」
このペリーの慧眼には恐れ入る。

三浦夏樹



「坂本龍馬」(立位)

企画展「天誅——土佐藩の奔走——」展を振り返って

文久2年(1862)から翌年にかけて、京都を中心に各地で横行した天誅事件。藩や幕府の役人のほか、公家の家来や浪士、商人など多くの人々が対象となり、30件ほどの暗殺事件が続発しました。令和6年度最後となる本企画展では、現代の日本では想像しがたいような当時の異様な情勢と、土佐藩や幕府の実態を様々な資料から紹介しました。

序章から、事件の被害者となった人物の首級と罪状文が晒されている場面を描いた資料が並んでいました。それらは京都・四条河原など、多くの人が行き交う場所に晒されました。そのおどろおどろしさに驚かれた方もいらっしやっただかと思えますが、事件の現場がどのような有様であったのかをご理解いただけたのではないのでしょうか。

本企画展の特徴の一つが、土佐藩に関する資料を多数取り上げた点です。「天誅」と聞くと、京都で起こった事件というイメージを持たれる方もいらっしやいます。しかし、文久2年4月に現在の高知

市帯屋町で起こった吉田東洋暗殺事件も天誅事件の一つといえます。東洋の事績を物語る資料や東洋の遭難に際して添えられた罪状の写し、実行犯探索のため上方に派遣された下横目に関する資料などを多数展示しました。これらを通して、東洋の人物像、さらに同暗殺事件をきっかけに、土佐藩の政局や役人の動向がどのように変化していくのかを紹介しました。

目玉資料の一つが「新選組袖章」(霊山歴史館所蔵)で、これを目当てにご来館される方もいらっしやいました。文久3年(1863)2月の足利三代木像梟首事件(京都・等持院に安置されていた足利尊氏・義詮・義満の木像の首と位牌が持ち去られ、三条河原に晒された事件)を一つの契機として、京都守護職松平容保は尊王攘夷派らへの取り締まりを強化します。そして守護職のもとで京都の治安維持を担ったのが、新選組でした。頻発した天誅事件は新選組結成のきっかけの一つとなったのです。また、幕府直轄都市であり、政治の中心となりつつあった京都における天誅事件

は、幕府役人の動向、さらには攘夷論や公武合体論を巡る幕府の各種政策にも影響を与えていました。

このように、天誅事件を残酷な「人斬り事件」としてみるだけではなく、当事者双方の背景にはどのような思想・信条があったのか、藩や幕府が事件にどのように対応していったのか、事件によって政治の在り方がどのように変化していったのか、といった点を踏まえて、多角的に考える必要があります。そうすることで、天誅事件のもつ歴史的な意味、さらには天誅事件という視点から幕末という時代を深く理解することができます。文字資料や絵画資料など様々な実物の資料を通じて、こうした点を少しでもお伝

え出来たのであれば、うれしく思います。

安岡達仁



展示室の様子

歴史の面白さを学ぼう！ イベントレポート

2月22日～24日の3日間は、「第2回 歴史の面白さを学ぼう！」を開催しました。館内の展示やクイズなどとおして、歴史を知る、歴史を学ぶ面白さを体感いただくイベントです。3連休は天気も良く、県内外からたくさんのお客様にご参加いただきました。

「学芸員レクチャー～歴史のウラ側を発見してみよう」は、今回のイベントの目玉企画です。本館2階の近江屋を使って、龍馬が中岡慎太郎と一緒に襲撃されたときの様子を学芸員の解説を交えながら再現しました。龍馬が襲われたときにとった行動や、最期に慎太郎に向けた言葉など、当時の様子を学芸員から紹介し、見学の子どもたちにも龍馬役、慎太郎役として参加してもらいました。なかには、メモを取りながら熱心に見学しているお客様もいらっしゃり、展示資料だけでは伝わらない歴史のウラ側を感じていただけたかなと思います。複製資料の龍馬の手紙や、模造の刀とピストルに触れる体験の時間もあり、予定していたイベントの時間を過ぎてはたくさんの子どもたちが楽しんでくれました。



展示を見ながらチャレンジする「りょうま館謎解きゲーム」は、クロスワード形式のクイズラリーです。龍馬の生涯や人となりを紹介している常設展示を見ながらクロスワードの穴埋めをして、最後にひとつの答えを導き出します。

また、本館で開催している「かくれ龍馬を探そう」のイベントは、今回からイラストを一新。こちらのイラストは、高知新聞で連載されている人気の4コマ漫画「きんこん土佐日記」の作者でもある、村岡マサヒロさんに描きおろしていただいたものです。本館には6体の龍馬イラストが隠れていて、ヒントを頼りに館内を探してもらいました。

謎解きゲームも「かくれ龍馬を探そう」も、問題用紙を手にしながら館内を何周も見てまわられる方もおり、子どもから大人まで楽しんでいただきました。



5月27日に、桂浜の坂本龍馬像は建立から97年を迎えます。それを記念して、次回のイベントは、5月24日・25日に「ハッピーバースデー龍馬像97th」を予定しています。お楽しみに！

竹田 綾

今年、龍馬生誕190周年です

年度が改まり、いよいよ新年度がスタートしました。今年度も「龍馬館」らしい企画によりまして、幕末史を巡る坂本龍馬顕彰の専門施設としての磨き上げを図りたいと考えています。

今年、龍馬の生誕（1835年）から190年の節目の年です。このため、新年度の取り組みを進めるにあたりましては、この周年も前面に押し出していければと思います。

展示事業は、当館のコレクションを活かした収蔵品展（2回）を加えて年6回、開催します。このたびの節目に際しては、それらの中の「幕末維新期の写真」展、「半平太と京都」展、「龍馬の評伝」展、「郷土坂本家の秘蔵」展における、龍馬と同時代に生き、直接的、又は間接的に影響を与えた要人たちの足跡や、関係の資料群、龍馬を巡る証言などの紹介を通して、龍馬の実像を紡いでいきたいと考えています。

龍馬は、混迷を極めた幕末日本を再建するため、一刻も早く政治・経済・外交・防衛の面で、外国に並

び立つような先進国家をつくらねばと、「サムライ政権」から「近代政権」への脱皮という国家構想を描きます。そしてその先駆けとなつて暗殺される直前まで、近代政権の組み立てに、全国の藩主や重役、志士らとともに奔走しました。

写真展では、高杉晋作や大久保利通ら仲間たちの生前の肖像を通じて、国家構想を実現に導くための龍馬の得難い人脈や、幕末の時代に西洋より伝来した新しい技術である写真文化の息吹をあわせて紹介いたします。

本年は、土佐勤王党のリーダー・武市半平太と同メンバー・岡田以蔵の没後160年にもあたります。半平太ゆかりの展示では、一藩勤王を掲げた半平太が藩政に台頭し、異例の登用で京都で推し進めた勤王活動に焦点を当てます。武市半平太を盟主とする土佐勤王党には龍馬や、中岡慎太郎なども加盟していました。

龍馬は常に、歴史上の大仕事を陰で支える役回りでした。ですから、その功績は公式記録には残りにくく、また、フィクションの

作品群で描かれるイメージが先行し、龍馬の実像と伝説とがまざり合うという、きらいが見受けられます。他方で、同時代の要人たちから一目おかれてもいることから、龍馬の評伝をテーマとする展示では、龍馬を巡る要人たちの言葉や関係資料を紹介し、それらの視点から龍馬の実像に迫ります。

龍馬の実家である郷土坂本家は、明治31（1898）年に北海道へ移住されています。坂本家は、龍馬直筆の歴史的資料や遺品をはじめ、ご一族や幕末志士ゆかりの資料を数多く所蔵し、その一部を京都国立博物館に寄贈されてきました。秘蔵展では同家のご協力を得て、これまでお披露目する機会がなかった資料群の初公開にも取り組みます。

龍馬生誕190周年を機に、こうした「龍馬館」ならではの展示事業を組み上げまして、龍馬の実像をさらにクローズアップし、多くの皆様に発信してまいりますので、新年度もお引き立てのほど何とぞよろしく願います。

令和7年度企画展紹介

4月19日（土）～6月1日（日）	企画展「幕末維新期の写真」展
6月11日（水）～7月10日（木）	収蔵品展「土佐藩京都藩邸史料」展
7月19日（土）～9月15日（月・祝）	企画展「半平太と京都」展
9月20日（土）～11月24日（月・祝）	収蔵品展「龍馬の評伝」展
12月4日（木）～令和8年2月1日（日）	企画展「柳内良一コレクション－維新史料の蒐集にかけた40年－」展
令和8年2月11日（水・祝）～4月7日（火）	企画展「郷土坂本家の秘蔵」展

●4つの企画展では、関連企画として記念講演会、学芸員による展示解説を行います。日程等の詳細はホームページで随時お知らせいたします。

令和六年度企画展「龍馬と長府藩」展 記念講演会

「坂本龍馬と長府藩」

下関市立歴史博物館 館長 古城 春樹 氏



講演される古城氏

総称として使う場合の「長州藩」は、宗家である萩毛利家のほか、いくつかの末家などを含みこんでおり、「長府藩」は末家のなかでも内分分知を受けた支藩の一つ、長府毛利家を藩主家とする。長府や下関を領し、公称は五万石であるが、実高は一〇万石で、これとは別に港町下関からの収入が二〜五万石分ほどあった。宗家とは政治方針などをめぐって頻繁に対立したが、これが可能であった背景には、豊かな経済力があつたといえる。

龍馬と長府藩の関係構築の契機は元治元年（一八六四）に遡る。第一次征長終結に伴う五卿の九州遷座交渉に際して、福岡藩士から「薩長和睦」が説かれた。これに長府藩士たちは賛成の意を示した。以後長府藩士が薩長和睦に関与することになる。慶応元年（一八六五）五

月には太宰府で、長府藩士井上少輔と坂本龍馬が対面し、閏五月六日の桂小五郎と龍馬の会談に結び付くのである。

慶応二年（一八六六）一月、龍馬は桂らの後を追って上方へ向かうが、これに同行したのが長府藩士三吉慎蔵である。慎蔵の同行については、龍馬護衛説がしばしば取り上げられるが、これは疑問である。三吉は京都の情勢探索の内命を受けており、これを第一の理由とみるべきである。加えて龍馬の視点からいえば、萩藩の変節を危惧して長府藩士の同行を求めたという可能性もあろう。

薩長同盟成立直後の一月二三日深夜、龍馬と慎蔵は伏見の寺田屋で幕府役人の襲撃を受けた。慎蔵は槍で、龍馬はピストルでこれに応戦、辛くも逃げ延びることができた。兩名は伏見薩摩藩邸で匿われたのち、京都の同藩邸に移っている。その後の慎蔵は、時勢探索の藩命を遂行するとともに、小松帯刀・西郷隆盛ら薩摩藩士とも誼を通じていたことが確認できる。以後の龍馬との交友についても、周知のとおりである。

続いて取り上げるのは、第二次征長最大の戦いであり、龍馬が参戦したことでも知られる小倉口の戦いである。二五〇〇〇の幕府軍に対して、長州藩は報国隊などを前線に配置したが、当初の兵員は一〇〇〇ほどであり、軍備の面では大きく劣っていた。六月一日、ユニオン号（乙丑丸）の引き渡しと兵糧米返却に訪れた龍馬は、高杉晋作から参戦の依頼を受けて承諾する。合戦当日となる

同月一七日、龍馬率いる乙丑丸は長州藩艦船五艘のうちの一艦として門司沖へ出撃、その後奇兵隊や報国隊などの活躍で長州勢は勝利を収めた。龍馬は長州勢のはたらきを間近で見えており、第一陣や第二陣の活躍を「見事ナリシ」「名高キ事ナリ」と称賛している。

戦いののち、長州側においては高杉晋作が幕府側の切り崩し工作を行っているが、龍馬もこれに協力している。そして龍馬は六月下旬に山口において萩藩主に拝謁し、「らしやの西洋衣の地など」を拝領した。最終的には七月三〇日に諸藩の兵が撤退することで終戦を迎え、龍馬もこの頃長崎へと発っている。

この時期、龍馬は七月二八日付で三吉慎蔵に手紙を認めている。龍馬は自らが乗船する船に事欠いている実情と伝え、長府藩が海軍を創設する際には亀山社中の人員を用いてくれるよう依頼している。こうした重要な事柄を記しながら、「何も別ニ申上事なし」という一文で書き始めているのが、何とも龍馬らしく興味深い書簡である。

続いて龍馬と長府藩の相互支援関係についてご紹介したい。まずは政治参謀のような龍馬の働きを取り上げる。印藤聿は長府藩の抱える政治問題について龍馬に相談しており、龍馬はこれに自らの考えを開陳していた。両者は対等な関係で忌憚なく意見を交わしていた。加えて龍馬がもたらす薩摩や幕府に関する情報は、最新かつ正確な情報を得たい長府藩にとって重要であったといえる。さ

らに龍馬は長崎に留学する長府藩士の子弟らの支援を行っていた点も指摘しておきたい。

一方で、長府藩は龍馬に資金等の提供を行っていた。一例として、長府藩はいろは丸運用資金として四〇〇両という大金を龍馬に貸与していた可能性がある。また下関の伊藤助太夫は、自らの屋敷の一室を龍馬夫妻に居室として使用させていた。伊藤邸滞在期の龍馬に関しては、歌会への参加やお龍に朝帰りや詫びる俚謡など様々な逸話が残されている。また、親友三吉慎蔵にお龍の後事を託し、実際に龍馬の死後、慎蔵がお龍の世話をしていたことは広く知られている。

さらに龍馬と長府藩の関係として、土佐商会の「馬関交易」を挙げておきたい。下関では諸藩が商売を試みており、土佐藩も同様であった。「馬関交易」は土佐藩と長府藩との契約で、長崎で購入した物品を下関で同地の商人が販売するというものであった。交渉に際しては土佐商会と長府藩の間を龍馬が介在したことが確認できる。結果、九月一日には交易の約定が成立したと思われる。ただし、以後の記録にはこの件に関する記述がみられず、実際の運営に関

しては不明である。

最後に龍馬の死と長府藩について述べておく。慶応三年（二八六七）十一月十五日の龍馬死去の報は二月二日に長府へ達し、伊藤家では龍馬の葬儀が行われた。その知らせは、時を置かず藩内に伝播していたようである。後年には長府藩士による慰霊が行われており、明治二九年（一八九六）に慎蔵の自宅で行われた三十年祭には、長府毛利家当主の元敏からの献歌もなされている。身分の上下を問わず、長府藩の人々が龍馬のことを大切に思っていたことの表れであろう。慎蔵は後年、龍馬のことをこう評している。「至極オトナシキ人ナリ」「万事温和ニ事ヲ処スル人ナリ」「胆力ハ極メテ大ナリ」。

最後に、当館（下関市立歴史博物館）が龍馬関係資料の収蔵数日本一というのは、下関の人々が龍馬のことを想い、資料を大切に伝えてきた証であることを申し添えて、講演を終えることにしたい。

令和六年度特別展

「三館連携企画 生誕二〇〇年 河田小龍」展

記念講演会

「舞台は回る、激動の時代の美術」

静岡県立美術館 館長 木下直之氏



講演される木下氏

河田小龍に限らず、幕末維新期の美術を理解するうえで、「誰の注文に応じ、何をどこでどのように描き、誰に向けて、どこでどのように見せたか」という視点を持つことが重要である。小龍は、七三年の生涯のうち、四四年を江戸時代、三〇年を明治時代に生きた人間であり、彼の美術は明治維新を挟んで大きく転回したといえる。本講演では、小龍の作品を中心に、同時代の作家の作品も参照しつつ、いくつかのテーマに沿いながら、激動の時代の美術とその転回について考えてみたい。

① 龍と観音はいつ「舞台」から姿を消したのか

小龍の時代から現代にかけて、画家が描く題材は大きく変化してきた。「龍」に着目すれば、小龍はその名のとおりに「龍図」を数多く描いている。また小龍とも付き合いのあった狩野永岳は、嘉永五年（一八五二）井伊直弼の御前で「富士山登龍図」を描いた。「富士山と龍」は伝統的な吉祥題材であり、多くの画人によって描かれた。

明治に入り、第三回内国勸業博覧会には観音を描いた二つの作品が出品された。一つは原田直次郎の油絵「騎龍観音図」、一つは小龍「観音図」である。伝統的な観音像である後者に比して、龍に乗った観音を描く前者はそれまでに見られない斬新な構図であった。伝統的テーマが画家たちの中で変化していることを物語っており、これはすなわち鑑賞する側の期待の変化に対応したものである。

同時にまた、展覧会という美術作品を鑑賞する新たな環境が生まれ、主題よりも作者への関心が高まったことにも留意すべきである。やがて、画家は龍も観音も描かなくなる。

② 絵のかたちと大きさ

「小梁画稿第一集」は、二〇代の小龍が大坂・京都での修行期に模写した作品を、縮図としてまとめた画帳である。この時期、小龍が京都で携わったのは、障壁画を中心とする建物の装飾であった。武家社会において、御殿などの公共空間は絵画で飾られており、これを支えた技術者集団が狩野派である。明治維新以後、武家社会が消滅し、ゆえにその政治と暮らしを支えた公共空間は存在意義を失う。他方、障壁画などを多く有した寺院もまた廃仏毀釈によって衰退する。

こうして、それらを彩った絵画はときに消失し、ときに流出する結果となった。絵画そのものの保存とそれを生み出す技術の継承が大きく揺らいでしまったといえよう。

また、障壁画などに描かれた画題が中国文化の影響を強く受けていたことにも留意すべきである。しかし、明治維新以降、その影響力は急速に失われ、西洋文化が強く意識されるようになる。現代人には馴染みが薄くなってしまった文化・習俗にも関心を向けていくことが、当時の作品を理解するうえでも重要ではないか。

少し視点を変えてみよう。小龍は「捕鯨図」など多数の絵馬を残している。絵馬は、たとえそこに馬が描かれていないにせよ、「絵」（鑑賞物）と「馬」（奉納物）双方の性格を保持しており、前近代から近代にかけて、絵画が鑑賞物へと変わる過渡的な性格を示しているといえるだろう。

また、「義経千本桜」という横幟は本展覧会の中でも特に興味深い作品の一つである。その大きさに注目すべきだ。現代においては、祭りであっても大規模な幟が立つことは稀である。幟といふ幕といふ、極端に縦長の、あるいは横長の絵は、美術館という現代の展示空間には容易に収まらない。小龍の生きた時代には、こうした造形表現が多く存在したことも、ぜひ知っていただきたい。

③ 書画会と展覧会

次に壬生水石「雅俗太平楽」に注目したい。この作品には、近世後期における土佐の文人たちの書画会の様子が描かれている。客の前で絵を描き、飲食を伴い、書家と画家が集う場が書画会であった。明治に入ると高橋由一のようにこうした形態を嫌う画

人が現れ、最終的には現代の展覧会（静寂の中で作者と鑑賞者が一対一で向き合う、飲食禁止）の形態へと向かっていく。

その一つの転機として、美術館を会場の中心に配置した内国勸業博覧会がある。内国勸業博覧会は明治期を通じて大きなイベントとして回を重ねるが、小龍も第二回以降に作品を出品している。特に、第三回に出品された「琵琶湖疏水絵図」は、明治以降になつて絵図や風景表現を手掛けてきた小龍の画業における頂点ともいべき作品である。

④ 肖像画

小龍は肖像画も多数描いている。肖像画においては、依頼者が望んだ人物の姿が描かれるのであり、いわばその人物の身代わりである。遺品と並んで遺影は亡き人物の姿をこの世にとどめるものであり、需要も大きかったと考えられる。

⑤ 記録画

失われていくものを記録する絵であり、ジョン万次郎から聞き取った内容をまとめた小龍の「漂異紀略」もこの部類に属するだろう。また、「高知城城下鳥瞰

図屏風」には旧来の幟と西洋式の旗が混在する様子が描かれており、いかにも文明開化の時代らしい高知の景観を記録した点で貴重である。

⑥ 動物画

小龍は「鯨図」をはじめ動物を描いた作品も多く残している。特に興味深いのは「霊鷹図」と「仙鶴図」である。吉祥・瑞兆を示す存在として鳥が認識されていたことを伝える資料である。

最後に小龍がオラウータンを描いた「猩々図」に注目したい。古くより日本でも「猩々」は知られていたが、特に赤面の猩々は、鎮西八郎為朝や鐘馗などとともに、疫病除けの効験が期待されていた。このように、何らかの「意味」を与えられた動物達が盛んに描かれたのである。

以上、小龍の作品を手掛かりとして、その特徴や時代背景などを考察してきた。江戸から明治を生きた小龍の生涯においては、彼を取り巻く環境が大きく変化していた。その時々には何が何を描き、その背景には何があったのかという点まで目を向けることで、小龍の生きた時代に接近できるのではないだろうか。

こぼれ話 | 犬歩棒当記(五十四) | 鎌倉史跡の薩長同盟

宮川 禎一

現代龍馬学会の会誌なのに「坂本龍馬が居なくても薩長同盟は出来た」と書いてみよう。なぜなら薩摩藩と長州藩はずっと前からひそかに関係を深めていたからだ。

以前、京都龍馬会の『近時新聞』三十九号にも書いたが、鎌倉を歩けば薩長同盟の根拠が良く分かる。鎌倉幕府を開いた源頼朝の石塔は十八世紀の安永年間に島津重豪によって整備されている。その頼朝墓をさらに右上に登れば大事な横穴墓が三基並んでいる。この地域独特の「やぐら」と呼ばれる崖墓だ。右から島津忠久墓、毛利季光墓、そして季光の父大江広元墓の順番である。もちろんこの三基が鎌倉時代以来のお墓であるはずもない。島津家と毛利家によってここが墓だと定められ、石塔や石碑を建てて整備したのは十八世紀後半から十九世紀初頭のことだ。この整備事業の際に薩摩藩と長州藩の重役の間で必ず「何かの話合い」があったのだ。

島津家・毛利家とも鎌倉以来という家系の意味をよく分かっていたからこそ「鎌倉に藩祖墓を整備した」のである。島津家の始祖島津忠久は源頼朝御落胤伝承をもっている。頼朝の右腕



奥が大江広元墓。右手が毛利季光墓。島津忠久墓は写真の右外側(鎌倉市西御門)

であった大江広元が毛利家の先祖であることはかなり正確だ。鎌倉時代に徳川家など影も形もない。島津家も毛利家も心の底で「徳川家なんぞ新参者だ」と考えていたはずだ。

安政の開国後に薩摩藩と長州藩が朝廷や幕府に対して「あれこれする理由」は「前田家や伊達家や山内家など戦国末の成り上りの諸大名と鎌倉以来の我々とは歴史の根本が違うのだ」という認識があったからであろう。島津家と毛利家の長い歴史の延長線上に薩長同盟がある。戊辰戦争の薩長軍とは「頼朝軍」だったのである。

東京に先祖の墓を訪ねて

〈前回の〈前編〉につづき、〈中編〉をお届けいたします。〉



小島 一男 (執筆者)

この時負傷した小島捨蔵を弘田親厚が治療した際の逸話が、「谷子爵談(寺石正路筆写)」に次のようにある。戊辰戦争中、野戦病院では負傷兵が少し回復に向かうと、軍医が膿みを拭き取ってから傷口に指を突っ込んで、肉の出来具合を探るといふ乱暴な診察が多かった。迅衝二番隊長小島捨蔵は、明治元年四月二十日、下野国安塚村の激戦で、銃丸がむこう脛から股座へ潜り込む重傷を負い、軍医弘田の手術を受けて銃弾を取り出す。回復に向かっ

たから例の傷口に指を突っ込む診察も終わり、いざ退院となつてベッドを離れた時、初めて我が脚が不自由になったと気づき、「あの救医者めにやりすえられた」と不平たらたらであった。凱旋後、その脚を治そうとして長崎へ赴き、名医の

評判の高い外国人医師・マンスフェルトの診察を受けた。彼は傷口を見て驚きを隠せず、「この手術をした医者は見事な腕前だ。私ならあなたの片脚はとくに切断していただろう」と感嘆した。小島は治療を断つてあたふたと帰国し、「弘田が長崎の外国人ほどの名医じゃつたら、この片脚はあの時からなかるうに、あいつが救医者じゃつたおかげで助かつたわい」と干城に言ったそう。なんとも負け惜しみの強い男である。谷干城は、この小島捨蔵という男に特別な感情をもっており、「我友小島捨蔵なるもの」と記し、「また捨蔵明治二年築地居留地の警固する大聖寺の本陣に切り、多人数を殺傷して帰り、割腹す。同行、川上友八、谷神之助、小笠原彦彌等四人なり。」と結んでいる。



安養院(東京都港区)にある小島捨蔵の墓石

このように小島捨蔵は、せつかく弘田に救われた命を、わずか二年足らずのうちで散らしてしまうのである。運命を共にした谷神之助は谷干城の養子乙猪の実兄である。この加賀陣屋に討ち入った事件は、平尾道雄氏、永国淳哉氏の書物に断片的に記され、渋谷雅之氏の「近世土佐の群像」に詳しい。土佐の資料としては少なく、『第十六代豊範公紀』に、斉藤智之(渡辺)の日記が記されているのみである。先に述べたように、四人は土佐藩から英国留学生に選ばれ、ロンドンに向けて出発する予定だった。事件はその出発予定日二日前。そして割腹自殺は出発予定日前夜のことであった。

〈後編につづき〉

〈中編〉

龍馬の手紙

26

私しが土佐に帰りたりるとき
くと、幕吏が大恐れぞ、は
（やきおもし申候、（中略）
伏見の寺田やでやどかり、
伏見奉行をおそれさしてや
ろふとぞんじおり候、

（慶応三年四月七日付坂本乙女宛）

慶応三年（一八六七）正月以降、龍馬は後藤象二郎との連携を深め、最終的には脱藩の罪が許された。その直後に姉乙女に宛てた手紙で、龍馬はこのように記している。前年一月の寺田屋事件では、伏見奉行所役人の襲撃を受け、重傷を負いつつ辛くも逃げ延びた龍馬であったが、その際に所持していたピストルで捕り手一人を射殺してしまった。そのため引き続きお尋ね者となり、その身を追われることとなった。

龍馬は言う。自らが土佐藩へ帰参したことを聞くと幕府の役人が大いに恐れ、気を揉んでいる、と。龍馬が土佐藩士に復帰したことは、つまり土佐藩が龍馬の保護者となったことを意味する。その土佐藩のリーダー山内容堂は、將軍徳川慶喜からの信頼が厚く、文久期以降は幕政にも参与するなど、幕末政治における重要人物である。龍馬の記す、幕吏の「大恐れ」には、こうした背景があったと考えられるだろう。

続けて、近日中に後藤象二郎とともに京都へ上ったときには、一年前に襲撃を受けた因縁の地である寺田屋に宿泊し、今度は逆に伏見奉行を恐れさせてやるうと、龍馬は意気揚々である。（確かに薩摩藩の庇護をうけてはいたもの）一介の浪人であった時に比べて、「土佐藩士」という肩書が、経済的な支援にとどまらず、大きな精神的な安心感をも龍馬に与えていたことを物語る一節のように感じられる。

昨年の一三〇号では、慶応三年六月二四日坂本乙女・春猪宛書簡から、「土佐藩士」としての自負が垣間見える一節を紹介した。今回扱った一節も踏まえて、慶応三年の龍馬の足跡と「土佐藩士」という立場との関係性は、今後深めてみたいテーマの一つである。

安岡達仁

龍馬館の あの日 あの時 あの時間



龍馬館の歴史や普段見ることがない龍馬館の一面を写真とともにご紹介するコーナーです。No.3

開館30周年記念

令和3年10月9日～11月21日までの期間、『開館30周年記念・龍馬真筆書簡特別展示』を開催しました。

宮内庁書陵部所蔵の薩長同盟の裏書を含む龍馬書簡10点を特別展示するというものです。

それはどの展示も大変、素晴らしく見応えのあるものでした。その展示の中のひとつである【薩長同盟の裏書】の展示は前期・後期と期間を分けて、それぞれ表書と裏書を展示しました。

ご来館されたお客様に期間にかかわらず、表裏どちらの側もご覧いただけるよう鏡を利用した展示方法でした。お客様は、それは熱心に鏡をのぞき込まれては、感慨深く、ご覧になられている様子でした。そのお客様の中には、遠足などでご来館されている小学



展示風景

生のお客様もいらっしゃいました。

展示をご覧になり、皆さん目をキラキラさせながら感想を話されています。

聞こえてくるのは…

「なんて書いてあるかわからんけど、すごいね。」

「なんで裏に赤で書いたんやろう。」

「坂本龍馬ってこんな字ながや。」

「なんか、すごいことした人ながやろう。」

お子さんならではの純粹な感想に、なんだかほっこりとした気持ちになりました。

きっと朱色で書かれた文字は、なんて書いてあるのか今はわからなくても、きっと記憶に残るものになったのではないのでしょうか。

坂本龍馬もあの日、あの時、自分の書いたものが未来で、たくさんの人々に感想を語られるとは…思っていなかったかもしれませんね。

谷本 弥生

京都と大阪の市街地に、いずれも「土佐稲荷」と呼ばれる神社が存在するのをご存知だろうか。筆者はここ1年で両神社を訪れる機会があった。今回はふたつの「土佐稲荷」を紹介しつつ、考えたことを述べてみたい。

京都の「土佐稲荷」は岬神社といわれ、繁華街四条河原町からほど近くに所在する。社伝によれば室町時代初期、鴨川の中州の岬(突端)に建てられた祠が由来とされる。その後数度の遷宮ののち、河原町四条上ルに設けられた土佐藩京都屋敷内に遷され、「土佐稲荷」と呼ばれるようになった。京都屋敷の鎮守として多くの土佐藩士から崇敬を受けており、土佐藩土岡崎菊右衛門の日記(当館所蔵)にも、文久3年(1863)元日、藩主豊範に随行して在京中の菊右衛門が参拝したことが記されている。

明治維新後に屋敷が売却されると、神社も幾度かの移転

を余儀なくされたといわれるが、大正2年(1913)にもとの土佐藩京都屋敷の一角である現在地に社殿が建立され、今に至るといふ。

大阪の「土佐稲荷神社」は、西区役所から長堀通りを渡つてすぐの場所に所在する。天正年間に創建され、江戸時代には周辺一帯に土佐藩大坂蔵屋敷が設けられていた。享保2年(1717)、6代藩主豊隆が伏見稲荷大社から御分霊を合祀して以来、土佐稲荷神社と称するようになったという。境内には8代藩主豊敷寄進の灯籠が現存しており、往時の面影を伝えている。

明治3年(1870)に同屋敷の責任者となった岩崎弥太郎は、同7年に土地と建物の大半を購入して居をなし、諸事業を展開していった。神社はその後、岩崎家・三菱の庇護のもと整備され、現在も市街地において一定規模の境内地と社殿を有している。

このように、京都・大阪の「土佐稲荷」はいずれも、土佐藩山内家の屋敷の名残を現代に伝えている。大名屋敷の敷地内に鎮守社がおかれる事例

は多くの藩で確認されており、それらは屋敷内の武士にとどまらず周辺住民からも崇敬を集めていた。祭礼時には一般に開放され、多くの人々が詣でており、屋敷の祭礼は極めて都市的な現象であったと指摘されている。近代の都市開発の結果、江戸・京都・大坂などに置かれた大名屋敷の遺構の多くは失われてしまっており、旧来の屋敷地内に今も現存する両神社は極めて稀な例であろう。

京都と大阪の「土佐稲荷」は、両都市における土佐藩の歴史、さらには都市の中で果たした神社の役割など、様々な歴史的事象に思いを巡らす出発点となりうる。普段、目にする何気ない景観の一つ一つが、現在に至る重層的な歴史の結果なのである。「なぜこの建物はここにあるのか?」「この地名はどのような由来なのか?」といったセンサーを働かせながら街を眺めると(かくいう私もまだ鈍感なセンサーしか持ち合わせていないが…)、新たな気づきも多



土佐稲荷神社:大阪府西区北堀江4丁目9-7



岬神社(土佐稲荷):京都市中京区木屋町通蛸薬師備前島町

■「海に見える・ぎゃらりい」

昨年12月24日～本年1月27日まで、企画展示室では「収蔵品展Vol.2 絵図・地図の世界」を開催しました。慶応2年（1866）1月の寺田屋事件で負傷した龍馬が匿われた、薩摩藩伏見屋敷の内部構造を描いた絵図や、龍馬が生まれたころの京都を描き、長辺170cmを超える大作「改正京町絵図細見大成」など、大小さまざまな資料を展示しました。キャプションでは、近世における出版文化との関係や、絵図を読み解く際の着眼点についてもご紹介することで、展示資料を様々な視点からお楽しみいただけたのではないかと思います。

「海に見える・ぎゃらりい」では、関連企画として「伊能大図-地図の上を歩いてみよう」を開催しました。伊能忠敬指揮のもと作製され、近世後期における測量地図の代表として知られる「大日本沿海輿地全図」-いわゆる伊能大図-についてご紹介するものです。ちなみに、伊能忠敬は文化5年（1808）の第6次調査で四国を測量しています。

「ぎゃらりい」の床には、「伊能大図」のうち四国地方を中心とする地図（縮尺1:36,000）を敷き詰めて、実際にその上を歩いていただけるようにしました。地図中には多くの地名が記載されており、ゆかりのある土地を探して楽しめる方が多くいらっしゃいました。「伊能大図」は実際の方角に合わせて配置しており、「ぎゃらりい」から見える雄大な太平洋と一体で楽しまれた方も多かったのではないのでしょうか。また、中2階から四国全体を俯瞰すると、そのスケール感に圧倒されるとともに、デジタル機器などない時代に、極めて精緻な地図が作製されたことに私自身、驚くばかりでした。

壁面には「伊能中図」を日本全国版で展示するとともに、伊能忠敬が行った測量の歴史や用いられた技法・用具を紹介するパネルを掲示しました。「伊能大図」が長年にわたる測量調査の末に作製されたこと、その基盤には高度な技術、そしてそれを活用できる多くの人々の支えがあったことを改めて学ぶことができました。

なお、「伊能大図-地図の上を歩いてみよう」の開催に際しては、一般財団法人日本地図センター様の多大なご協力をいただきました。記して感謝申し上げます。



「伊能大図」展の様子



中2階からみた「伊能大図」

安岡 達仁

入館状況

2025年3月20日現在

(1991年11月15日開館以来 33年126日)

◆入館者数 4,746,847人

■リニューアルオープン(2018年4月21日)以来 810,087人

編集後記

本号の編集を開始した2月上旬は、「最強寒波」が一週間ほど居座った時期で、団体のお客様のご予約や職員の出張経路の変更などが続きました。発行される4月上旬には、穏やかな春の陽気を体いっぱい味わえていることを願うばかりです。

さて、令和7年度がスタートしました。「飛騰」では本年度も企画展に関する情報ははじめ、当館にかかわる様々な事柄を分かりやすくお伝えしていきます。引き続きご愛読いただきますよう、宜しくお願い申し上げます。(や)

館だより“飛騰”第133号(年4回発行)表紙題字:書家 沢田 明子氏

発行日 2025(令和7)年4月1日
 発行 公益財団法人高知県文化財団
 高知県立坂本龍馬記念館

〒781-0262 高知市浦戸城山830
 TEL (088)841-0001 FAX (088)841-0015
<http://www.ryoma-kinenkan.jp>
 「飛騰」に対するご意見ご感想などお寄せください

開館時間 9:00～17:00 年中無休

入館料 一般500円 高校生以下無料

(企画展開催時700円 4月19日より900円)

高知県・高知市長寿手帳所持者・療育手帳・身体障害者手帳・精神障害者保健福祉手帳・戦傷病者手帳・被爆者健康手帳所持者とその介護者(1名)は無料



「飛騰」は郵送料のみのご負担でお届けいたします。購読希望の方は120円切手をご希望回数(4回分まで)お送りください。
 〒781-0262 高知市浦戸城山830 高知県立坂本龍馬記念館「飛騰」購読係 まで